

南アフリカ共和国の言語事情

河 崎 靖

1. アフリカーンス語の位置づけ¹⁾

アフリカーンス語は、かつてオランダの植民地であった時代のオランダ語を母胎として、そこにいくらかフランス語・ドイツ語などの欧州諸言語、さらにマレー語や現地の言語が融合してできあがった言語である。こうした事情により系統的には基本的にゲルマン語派に属しながらも現在、南アフリカ共和国の公用語の1つとなっているのは周知の通りである。すなわち、言語学的にはもともとオランダ語の方言（17世紀のゼーラント〈Zeeland〉方言）であったことばが、南アフリカの旧白人政権のもと正式の国語となり、オランダ語から独立した言語となったと言える（基礎語彙はなお多く共通している）。言ってみればアフリカーンス語の文法はオランダ語文法がいわば簡略化したもの（例：名詞の性の区別がない、動詞が人称変化しない、等）であり²⁾、オランダ語や低地ドイツ語の話者はアフリカーンス語を母語とする者と、予備知識なしでも、ある程度、相互理解が可能であると言われている。

植民地支配という歴史的経緯によって、アフリカーンス語の特徴としてマレー語も混入している言語という点も注目に値する。つまり、南アフリカがオランダの植民地であった17世紀、同じくオランダ植民地であったインドネシアから労働力として多くのマレー人が南アフリカへ渡ったのである。こうしてオランダ語とマレー語の混交が始まり、のちのアフリカーンス語の語

彙へも影響を与え、この意味では、アフリカーンス語はアジアの言語の影響を受けた唯一のゲルマン語系の言語である。なお、この点を重視してアフリカーンス語はもはやゲルマン語派ではないとする見解も存在する。ピジン・クレオール語としてアフリカーンス語を捉える研究もある。しかし前述のとおり、話者の実感としては今日もアフリカーンス語は、オランダ語・低地ドイツ語の話者とかなりの程度、会話が可能な近さをもっているという事実も軽視するべきではないであろう。

さて、南アフリカ共和国には言語がおよそ 25 あるとされている。新憲法（1996 年）ではそのうちの 11 の言語が公用語に採択された。この時点で、ズールー語話者は 854 万人、コーサ語話者は 689 万人、ツワナ語話者は 360 万人いると言われ、アフリカーンス語話者は 619 万人、英語話者は 343 万人と報告されている。ただ、日常的な言語使用としては、アフリカ諸言語を話すさまざまな民族出身の労働者が例えば労働現場でコミュニケーションをとるためには、彼らの間で生み出されたファナガロ語のようなリング・フランカの言語が用いられるという現実があった。今日では、徐々に英語が他の言語より優勢な位置に立つようになり、リング・フランカの機能を果たすようになってきている。このように確かに、英語が次第に優勢になってきているのは事実である。しかしながら、アフリカーナー（オランダ系白人）が自らアフリカーンス語を捨てるという選択肢はない。なぜなら、それはすなわちアフリカーナーとしてのアイデンティティーの放棄に他ならないからである。

11 ある公用語（アフリカーンス語・英語・ズールー語・南ンデベレ語・ペディ語〈北ソト語〉・ソト語〈南ソト語〉・スワジ語・ツォンガ語・ツワナ語・ヴェンダ語・コサ語）が南アフリカ共和国という 1 国内でいかに機能しうるのかという問題は、社会言語学・方言学的な意味においてアフリカーンス語の位置づけと大きく関わってくる。従来「州を単位として 3 つの公用語を定める」という原則での公用語政策を行ってきた南アフリカ共和国である

が、そもそもこの国の言語政策の根幹でもある公用語のあり方をどのように見直していけばよいのか、この点を考究することは現実的に緊急の課題である³⁾。

ここで例証として、以下に、アフリカンス語の次の1テキストを挙げる⁴⁾(引用：『新約聖書』の「主の祈り」〈マタイ伝：第6章 第9節～13節〉)⁵⁾。

第9節

ア： Ons Vader wat in die hemel is, laat u Naam geheilig word;

「だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、／御名が
崇められますように。』

英： Our Father in heaven, Hallowed be Your name.

オ： Onze Vader in de hemel, laat uw naam geheiligd worden,

独： Unser Vater im Himmel, / dein Name werde geheiligt,

ラ： Pater noster, qui in caelis es, anctificetur nomen tuum,

father our who in heavens are be hallowed name your

ギリ： Πάτερ ἡμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς ἁγιασθήτω τὸ ὄνομά σου

father our the in the heavens be hallowed the name your

第10節

ア： laat u koninkryk kom; laat u wil ook op die aarde geskied, net soos in die hemel.

「御国が来ますように。御心が行われますように、／天におけるように
地の上にも。』

英：Your kingdom come. Your will be done On earth as it is in heaven.

オ：laat uw koninkrijk komen en uw wil gedaan worden op aarde zoals in de hemel.

独：dein Reich komme, / dein Wille geschehe / wie im Himmel, so auf der Erde.

ラ：veniat regnum tuum, fiat voluntas tua, sicut in caelo, et in terra.
come kingdom your be done will your as in heaven and on earth

ギリ：ἐλθέτω ἡ βασιλεία σου ἡ γεννηθήτω τὸ θέλημα σου, ὡς ἐν οὐρανῶ καὶ ἐπὶ γῆς
come the kingdom your be done the will your as in
heaven and on earth

第 11 節

ア：Gee ons vandag ons daaglikse brood;

「わたしたちに必要な糧を今日与えてください。」

英：Give us this day our daily bread.

オ：Geef ons vandaag het brood dat wij nodig hebben.

独：Gib uns heute das Brot, das wir brauchen.

ラ：panem nostrum supersubstantialem da nobis hodie;
bread our necessary give us today

ギリ：τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπιούσιον δὸς ἡμῖν σήμερον
the bread our the daily give us today

第 12 節

ア : en vergeef ons ons oortredings soos ons ook dié vergewe wat teen ons oortree;

「わたしたちの負い目を赦してください、／わたしたちも自分に負い目のある人を／赦しましたように。」

英 : And forgive us our debts, As we forgive our debtors.

オ : Vergeef ons onze schulden, zoals ook wij hebben vergeven wie ons iets schuldig was.

独 : Und erlass uns unsere Schulden, / wie auch wir sie unseren Schuldnern erlassen haben.

ラ : et dimitte nobis debita nostra, sicut et nos dimisimus debitoribus
and forgive us debts our as too we forgive debtors
nostris;
our

ギリ : καὶ ἄφεσ ἡμῖν τὰ ὀφειλήματα ἡμῶν, ὡς καὶ ἡμεῖς ἀφήκαμεν
and forgive us the debts our as too we forgive
τοῖς ὀφειλέταις ἡμῶν
the debtors our

第 13 節

ア : en laat ons nie in versoeking kom nie maar verlos ons van die Bose.

「わたしたちを誘惑に遭わせず、／悪い者から救ってください」

英 : And do not lead us into temptation, But deliver us from the evil one.

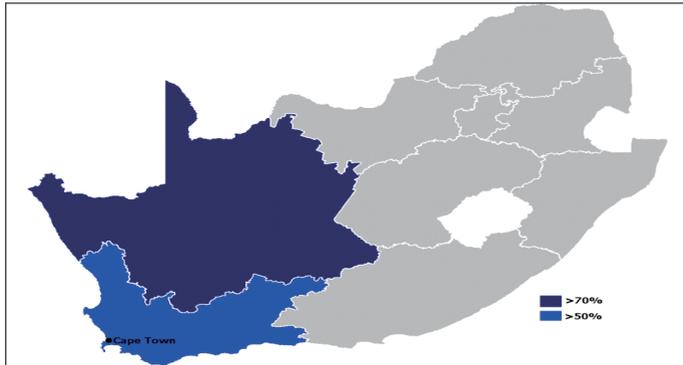
オ : En breng ons niet in beproeving, maar red ons uit de greep van het

kwaad.

独：Und führe uns nicht in Versuchung, / sondern rette uns vor dem Bösen.

ラ：et ne inducas nos in temptationem, sed libera nos a malo.
and not lead us in temptation but deliver us from evil

ギリ：καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν, ἀλλὰ ῥύσαι ἡμᾶς ἀπὸ τοῦ πονηροῦ,
and not lead us in temptation but deliver us from
the evil



南アフリカ共和国におけるアフリカーンス語話者の割合
(北西部：70%以上、南西部：50%以上)

2. アフリカーンス語の言語的特徴

かつてブール人 (boer：オランダ語で「農民」の意。南アフリカへの移民にこの階級の人たちが多かったからこの語が白人移民の名となったと言われている) と呼ばれていたオランダ系白人 (=アフリカーナー) が母語とする

ほか、カラード（＝白人・黒人など有色人種の混血。今日ではブラウンと呼ばれることもある）にも母語とする者が少なくない。もっとも、イギリスの植民地になってから今日まで、英語の影響を非常に大きく受け、概してその語彙・文法に英語的な用法が多く見られる。

アフリカーンス語とオランダ語は実に95%以上の語彙を共有している。確かに正書法的な意味でのスペルのずれがあるが、そのずれ方も体系的と言える面がある（ア hy：オ hij「彼が」）。アフリカーンス語を母語とする人はオランダ語を苦もなく理解できるけれども、逆にオランダ語話者はアフリカーンス語に慣れるのに少し時間がかかるようである。

少し用例をもって示してみよう（あくまで参考までであるがカタカナ表記を添えておく）。

Ja/Nee	ヤー／ニエ	「はい／いいえ」
(Baie) dankie	バイエ ダンキー	「(どうも) ありがとう」
Nie te danke	ニー トゥ ダンケ	「どういたしまして」
Plesier	プレシール	「喜んで」
Asseblief	アッセブリフ	「どうぞ」
Ja, asseblief	ヤー アッセブリフ	「ええ、お願いします」
Nee, dankie	ニエ ダンキー	「いいえ、結構です」
Welkom	ヴェルコム	「いらっしゃい」
Hoe gaan dit?	フー ハーン デイットゥ	「お元気ですか」
Goed, dankie	フートゥ ダンキー	「はい、元気です」
En met jou?	エン メットゥ ヤウ	「あなたは」

Goeiemôre	フイエモーレ	「おはようございます」(午前)
Goeiemiddag	フイエミダハ	「こんにちは」(午後)
Goeienaand	フイエナートウ	「こんばんは」
Goeienag	フイエナハ	「おやすみなさい」
Totsiens	トットウシンス	「さようなら」
Sien jou/julle later (môre)		「じゃ、また後で(明日)」
シン	フィア ヤウ/ユレ	ラーテル (モーレ)
Koebaai	タッタ/クバーイ	「バイバイ」

(口語的用法。英語から借入)

Ekskuus tog	エクスキュース トホ	「すみませんが、……」
Jammer	ヤマー	「残念です」
Verskoon my	フィアスコーン メイ	「ごめんなさい」

Smaaklike ete	スマークラケ エーテ	「召しあがれ」
Gesondheid	ヘソンドウヘイトウ	「乾杯」

Dis reg.	デイス レヒ	「正しいです」
Dis verkeerd.	デイス フェアケールトウ	「間違っています」

Ek weet nie. 「知りません」

エク ヴェートウ ニー

Ek verstaan nie. 「(あなたのおっしゃっていることが) わかりません」

エク フィアスターン ニー

Ekskuus 「何とおっしゃいましたか」

エクスキュース

Kan u my help? 「助けていただけますか」

カン ユ メイ ヘルプ

Ek praat nie so goed Afrikaans nie. 「アフリカーンス語を少しだけ話します」

エク プラートゥ ニー ソー フートゥ アフリカーンス ニー

文法に関わる事例としていくつか挙げてみる。

(1) 動詞の定形（現在人称変化）

werk 「働く」という動詞を例にして、主語になる人称代名詞とともに動詞の人称変化を見てみよう。

単数		複数	
私は	ek werk (<i>I work</i>)	私たちは	ons werk (<i>we work</i>)
君は	jy werk (<i>you work</i>)	君たちは	julle werk (<i>you work</i>)
	あなたは	u werk (<i>you work</i>)	あなたがたは
彼は	hy werk (<i>he works</i>)		
彼女は	sy werk (<i>she works</i>)	彼(それ)らは	hulle werk (<i>they work</i>)
それは	dit werk (<i>it works</i>)		

英語と違って2人称の代名詞が2種類ある。親しい関係の人には *jy* 「君」・*julle* 「君たち」(親称)で、それ以外の例えば公的な場面では *u* (敬称)で話しかける。ただし、実際の会話では *u* が使われることはあまりなく、*jy*・

julle の方が多く用いられる。2 人称における親称と敬称の使い分けは英語以外のヨーロッパ言語にはよくある現象である。また、英語の be ~ ing のような進行形はないので、ek werk は「私は働く」・「私は働いている」の両方の意味をもち得る：Ek drink koffie. 「私はコーヒーを飲む・飲んでいる」、Die president open die sitting. 「大統領は会議を開く・開いている」、Hy eet baie vleis. 「彼はたくさん肉を食べる・食べている」。

1 人称単数：Ek woon hier.

私はここに住んでいる。

蘭：Ik woon hier.

独：Ich wohne hier.

英：I live here.

2 人称単数：Jy lees Afrikaans.

君はアフリカンス語を読んでいる。

蘭：Jij leest Afrikaans.

独：Du liest Afrikaans.

英：You read Afrikaans.

3 人称単数：Hy woon in Pretoria.

彼はプレトリアに住んでいる。

蘭：Hij woont in Pretoria.

独：Er wohnt in Pretoria.

英：He lives in Pretoria.

1 人称複数：Ons drink koffie in die restaurant.

私たちはレストランでコーヒーを飲む。

蘭：Wij drinken koffie in het restaurant.

独：Wir trinken im Restaurant Kaffee.

英：We drink coffee in the restaurant.

2 人称複数：Julle gee die les.

君たちは授業を教えている。

蘭：Jullie geven de les.

独：Ihr erteilt den Unterricht.

英：You teach the lesson.

3 人称複数：Die kinders skop die bal.

その子どもはボールを蹴る。

蘭：De kinderen schoppen de bal.

独：Die Kinder schießen den Ball.

英：The children kick the ball.

(2) 動詞の時制（過去形）

be 動詞の活用は下表の通りで、人称・数によって変化することがない。

ek	was siek	ons was siek	
jy	was siek	julle was siek	「～は病気だった」
hy/sy	was siek	hulle was siek	

一般動詞の場合も、動詞は人称・数に応じた活用をすることがない。

ek

jy

hy/sy + **het** + medisyné + gedrink. 「～は薬を飲んだ」

ons 過去分詞

julle

hulle

助動詞として **het** (英語の **have**) を用い、本動詞の過去分詞形 (ここでは **gedrink**) を文末におく。その他の文成分 (目的語や副詞など) は **het** と過去分詞の間におかれる。なお、過去分詞の形は、不定詞 (**drink** 「飲む」) の前に接頭辞 **ge-** を付けることによって形成される (**ge-drink** : **drink** の過去分詞)。このように、英語の完了形のような形態をとるが、この形式が過去の事柄を表わすのに一般的に使われる形である。

主語 + 助動詞 + その他の語句 + 動詞 (過去分詞)

- Ons het met die trein gekom.** 私たちは列車で来た。
Sy het te hard gewerk. 彼女は当時、懸命に働いていた。
Wie het die koffie gebring? 誰がコーヒーを持って来てくれたのか。
Het al die mense al geslaap? 人々は皆すでに眠っていたか。

複合動詞で非分離の接頭辞 (**be-**, **er-**, **ge-**, **her-**, **ont-**, **ver-**) をもつ動詞の場合、過去分詞に **ge-** を付けず不定詞と同形となるが、助動詞 **het** と共に用いられ「**het** + 過去分詞」で過去形を形成する。

Sy **het** die vraag herhaal. 「彼女は質問を繰り返した」

Ek **het** hom 'n keer in Tokio ontmoet.

「私は一度、東京で彼に会ったことがある」

語尾が *-eer* で終わる動詞は、*ge-* を付けなくてもよいが、たいてい「*ge-* 語幹」の形で現われる。

Hy **het** in Kioto (ge)studeer. 「彼は京都で学生生活を過ごした」

現在形 「～病気である」 「～薬を飲む」	過去形
[I] Ek is siek. Ek drink medisyne.	[I] Ek was siek. Ek het medisyne gedrink.
[YOU] Jy is siek. Jy drink medisyne.	[YOU] Jy was siek. Jy het medisyne gedrink.
[HE/SHE/IT] Hy/Sy is siek. Hy/Sy drink medisyne.	[HE/SHE/IT] Hy/Sy was siek. Hy/Sy het medisyne gedrink.
[WE] Ons is siek. Ons drink medisyne.	[WE] Ons was siek. Ons het medisyne gedrink.
[YOU plural] Julle is siek. Julle drink medisyne.	[YOU plural] Julle was siek. Julle het medisyne gedrink.
[THEY] Hulle is siek. Hulle drink medisyne.	[THEY] Hulle was siek. Hulle het medisyne gedrink.

以上、**be** 動詞・一般動詞の過去形の作り方をまとめると前頁の通りとなる⁶⁾。

(3) 否 定

否定は **nie** によって表されるが、文中におかれる他に文末にもう 1 回 **nie** が現われる。2 つの **nie** が一組になって否定文を作ることになる。これはアフリカーンス語に特徴的な現象である。

Sy kyk nie televisie nie.

彼女はテレビを見ない。

Hy gaan nie vandag met die bus nie.

彼は今日バスで行かない。

Dit is nie reg nie.

これは正しくない。

Jy praat nie duidelik nie.

君ははっきりと話さない。

Sy sal nie kom nie.

彼女は来ないでしょう。

Johannesburg is nie die land se hoofstad nie.

ヨハネスブルクは国の首都ではない。

Ek het hom *nie* gesien *nie*. (目的格の代名詞がある場合)⁷⁾

私は彼に会わなかった。

nie が他の否定辞と共に使われ否定文を作ることもある。

***Niemand* het 'n woord gesê *nie*.**

誰も何も言わなかった。

Daar het nog *niks* gebeur *nie*.

そこではまだ何も起こらなかった。

Hy kan die boek *nêrens* vind *nie*.

彼はその本をどこにも見つけられない。

主語と動詞だけからなる短い文では2つ目の *nie* は使われない。

Ek weet *nie*. 私には知らない

Sy gaan *nie*. 彼女は行かない。

Hy praat *nie*. 彼は話さない。

3. アフリカンス語の文化的側面

南アフリカ共和国と言えば「アパルトヘイト (*apartheid*): 人種隔離政策」というくらい、日本でもこの悪名高い政策は知れ渡っている。1994年4月、全人種参加の初の総選挙が行われ新しい憲法が制定されてようやく同法は廃止されたが、アパルトヘイトは今も悪法の代表例として多くの人に記憶

されている⁸⁾。そして、実はこの語はアフリカーンス語である。この語はアフリカーンス語で「隔離」(apart「分離」+heid「状態」という意味をもつ。すなわち、南アフリカ共和国における、白人優位主義に基づく白人・非白人(黒人やインド系などアジア人あるいはカラードとよばれる混血民)の関係を規定し差別することを指し示している⁹⁾。アパルトヘイトは1948年に法制化され、以後、南アフリカ政府によって強力に推進されたが、1980年代後半、国際社会から激しい非難を浴び、1994年にネルソン・マンデラが大統領(アフリカ民族会議:ANC)になりこの法律は完全に撤廃されるに至った。1987年、国際社会がアパルトヘイトに反対して、文化交流を禁止し経済制裁に動く中で、逆に日本は南アフリカと最大の貿易相手国となり、1988年、国連・反アパルトヘイト特別委員会(ガルバ委員長)により遺憾の意が表明されたほどであった(ガルバ声明)。片や、南アフリカにとって大きな貿易相手でもある日本人は「名誉白人(Honorary Whites)」として制度上の差別待遇を免ぜられていたのであった。

1961年にイギリス連邦を脱退するまでの歴史的経緯からして、南アフリカ共和国で英語が重要な位置を占めるのは当然のなりゆきであり、この英語とアフリカーンス語が主に白人が使用する言語として公的な役割を果たしてきた。ただし、南アフリカの公用語(official language)はこれら2言語の他に9つある(「南アフリカ共和国」を各言語で記すと、それぞれ以下のような表記となる)¹⁰⁾。

- アフリカーンス語: Republiek van Suid-Afrika
- 英語: Republic of South Africa
- ズールー語: IRiphabliki yaseNingizimu Afrika
- 南ンデベレ語: IRiphabliki yeSewula Afrika
- ペディ語(北ソト語): Rephaboliki ya Afrika-Borwa

- ソト語（南ソト語）：Rephaboliki ya Afrika Borwa
- スワジ語：IRiphabhulikhi yeNingizimu Afrika
- ツォンガ語：Riphabliki ra Afrika Dzonga
- ツワナ語：Rephaboliki ya Aforika Borwa
- ヴェンダ語：Riphabuḽiki ya Afurika Tshipembe
- コサ語：IRiphabliki yaseMzantsi Afrika

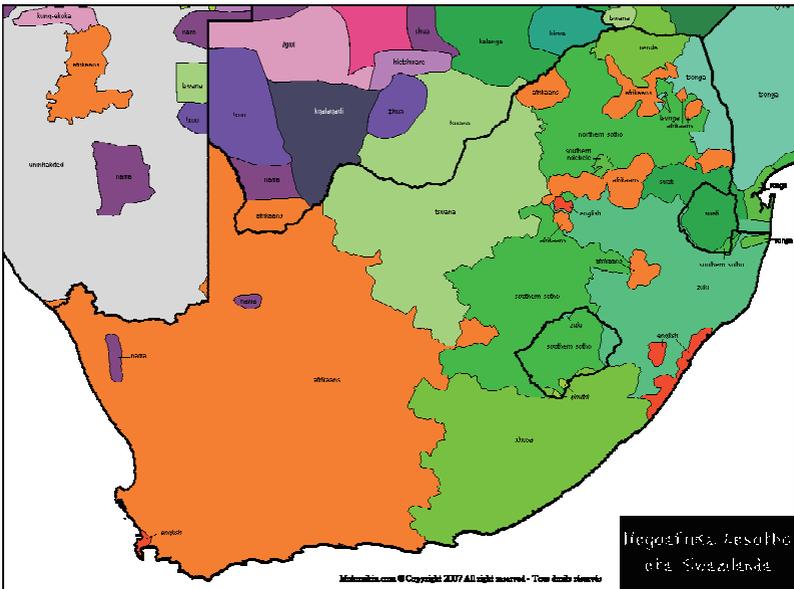
ここに挙げた 11 の諸言語が公用語として認定されたのは 1994 年で、マンデラ大統領の誕生に伴ってのことであった¹¹⁾。ただ、黒人言語が公的な言語と認められたから公用語の問題が解決したといふわけではなく¹²⁾、90 年代中盤あたりから南アフリカには新しいより中立的な言語をつくろうという動きがあり、まさに真剣に議論されているというのが先述の通り現実的状况である¹³⁾。

言語としてのアフリカーンス語は、主として「白人」（＝オランダ系を中心とするアフリカーンス語を話す住民）および「カラード」（白人〈イギリス系・オランダ系〉と先住民族との混血を中心にした混成民）によって使用されるため、どうしても社会の上部、支配層の言語というイメージがつきまとう。しかし、これをもってアフリカーンス語の実態と解するのは早計である。実際には、200 万人の白人・200 万人以上のカラード（混血）に用いられていると言われていたが、言語使用者の多様性に加え、その社会的役割もやはり無視できない意義をもっている。すなわち、人種間・社会階層間の橋渡しを担う公用語として機能し、白人やカラードとのコミュニケーションのために黒人に広く使用されているという意味で、アフリカーンス語の果たす役割は決して小さくない。また、アフリカーンス語は、南アフリカの外にも、ナミビア共和国・ボツワナ・レソト・スワジランド・ジンバブエ・ザンビア・マラウイ・タンザニア・ケニアにも話者がいる¹⁴⁾。つい見過ごされがち

だが、アフリカ大陸南部における公用語としてのアフリカーンス語の働きも忘れてはならない（次表参照¹⁵⁾。

そもそもアフリカーンス語という1個別言語も、その実態は各社会層のことばの総和である。公用語としてのアフリカーンス語も、それらに支えられてはじめて生命を維持する存在と言える。ことばの社会的揺れというのは言語史の立体的投影図である。ことばの社会変異は言語の実態に他ならない。この社会方言(sociolect)は各言語文化の基層であり、人間の営為を表現する母語である。ただ単にことばを時空間的拮がりの中での変移として理解して、その変容の様子を切り取り理解すれば社会方言は理解できるというものでは決してなく、歴史的・社会的な要素へ十分な目配りを働かせ言語の諸相を客観的指標のもとに考察しなくてはならない¹⁶⁾。

ことばの社会層という場合、それは社会の各層の歴史・文化を反映してい



る言語表現のことである。それが世代と共に変化していくが、その変容とは多くの場合、少なからず社会層同士の融合であろう。言語学の立場からすれば、こうした問題を調査し研究する中立的な視点が必要となってくる。これこそがフィールドワークの醍醐味である。対象となる言語の文法記述のためには音レベルの記述が済まされていることが前提となる。音韻の記述がなければおのおの個別言語の表記ができないからである。それぞれの言語で区別のある音は聞き分け書き分ける能力が必要とされる。また文法記述とは言っても語彙その他の言語事象と密接に関連しているわけであるから、社会的な関心を広くもって臨むことが大切である。これらの課題をひとつずつ確実にこなしていくことによって、はじめて個別言語の正確なフィールド調査が成り立つのであり、そのプロセスは言語・地域ごとに異なったものである。

フィールドワークをこなすためには、専門家である共同研究者 (**native speaker**) との連携が必須であると同時に、現地の生きたことばの用法を観察することなしには始まらない。アフリカーンス語をフィールド調査の中心とし、併せて南アフリカ共和国の他の公用語をも視野に収めながら、ことばの社会変異のあり方を体系的に明らかにすることがアフリカーンス語の場合、今後の課題である。文法的な全体像をつかんだ後に、社会方言、すなわち段階的な揺らぎを見せながらも言語圏全体を見渡すと1つの統一体としての言語体系が見て取れるモデル、つまり、さまざまな言語現象の何種類ものヴァリエーションを捉え、複合的な要素をデザインして表示するしくみ作りが望まれている現状である。

言語の問題に関しては、共時的な知識だけでは理解できない事柄に対ししばしば通時的なアプローチが妥当な解答を用意してくれる。言語を歴史的に捉えるということは、すなわち現代語を深く理解することでもあるのだ。とりわけアフリカーンス語のようなクレオール的性格をもつことばを言語政策の観点から研究する場合、通時的視点は特に重要である。それぞれの社会的

変異（ヴァリエーション）のありようについても、その歴史を詳細に検討することによってはじめてことばの実相が把握できるのである。すなわち、ことばの揺らぎを捉えるにも、それが生じた根本的な背景、つまり社会的変異の成立のプロセスを時間軸に沿って考察しておくことが不可欠である¹⁷⁾。

なお、60頁以降に挙げられるような文献がアフリカンス語に関わる代表的な書籍である（日本語の新しい文献としては、神谷俊郎（2009）「11公用語政策の理想と現実 — アパルトヘイト後の南アフリカ共和国言語事情」梶茂樹・砂野幸稔『アフリカのことばと社会 — 多言語状況を生きるということ —』三元社や楠瀬佳子（2002）「南アフリカの言語政策 — マルチリンガリズムへの道」『京都精華大学紀要』第23号等があり、これらに挙げられている参考文献も有用である）。



注

- 1) これまで日本語で書かれたアフリカーンス語の文法書は出版されてこなかった。また英語等で執筆されたアフリカーンス語の文法書は、当該言語（英語なら英語）の予備知識がかなり高度なレベルで前提となっており、必ずしも日本人学習者に向けたものとは言えなかった。母語で書かれたものがあればそれにこしたことはないであろうが、例えばヨーロッパの大言語であるドイツ語ですら、アフリカーンス語文法について執筆した書籍はわずかに数えるほどといった状況である。英語で書かれ一般に知れ渡っている書籍としては、**Helena van Schalkwyk** “*Teach Yourself Afrikaans*” (1993 年) がある（この教材にも **Lydia Mcdermott** (2005 年) の版に CD 音源が付いている）。また、自習目的で初級者向けに執筆されたもの（音源付き）に、**Bruce Donaldson** “*Colloquial Afrikaans*” (2000 年、London) や同著者 “*opSTAP minicursus Afrikaans*” (2002 年、Bussum、オランダ語による執筆) があり、さらに同著者による本格的な文法書 “*A Grammar of Afrikaans*” (1993, Berlin) がある（これには詳細な文法の記述の他に、巻末に英語の逐語訳を添えたサンプル・テキストが付いている）。
- 2) オランダ語より派生して以来、文法が簡素化（語尾変化などの消失）し、時制や冠詞の性別が消滅した。基本的にはゲルマン系の言語ではあるが、ある意味、一種のクレオール語とみなすことも可能ではある。
- 3) こうした問題意識は、一般的にどの国の言語政策にも有効な論点となり得る。例えば実際に言語紛争の起こっている他の国家・地域（ベルギーなど）の問題解決の新しい知見を提供する可能性があろう。
- 4) 下に引用する聖書は、英語：New King James Version、蘭語：De Nieuwe Bijbelvertaling、独語：Einheitsübersetzung である。
- 5) 日本語のテキストは「主の祈り」の新共同訳である：「日本にきた初期の宣教師達が伝道を始めながらしたことは、聖書を日本語に訳すことであった。その一人ヘボン、日本語を学び、医療奉仕をしながら日本の人々に神の愛を伝えた。福音を人々に理解できる言葉で伝えるためにはどうしても聖書を日本語に訳す必要を感じ、その翻訳に専念、ようやくこれを完成した。これが文語訳聖書であった。そして日本で神のことばが自由に読めるようになった」（鳥羽

季義「聖書ほんやく」No. 225、2008年8月号、1頁、ウィクリフ聖書翻訳協会）。

- 6) 動詞 *hē*「持つ」の過去分詞の形は不規則で *gehad* である (*Hulle het gister'n ongeluk gehad*. 「彼らは昨日、事故を起こした」)。また、*be* 動詞の場合、「*was + gewees* (過去分詞)」という余剰的な形態をとることもある (*Ek was siek gewees*. 「私は病気だった」)。
- 7) ただし、*Ek ken hom nie*. 「私は彼を知らない」となる (*nie* が1つ)。
- 8) 人種差別思想に基づいた「国内植民地支配」と呼ばれることもある (神谷 2009:482)。神谷 (2009) は日本語で書かれた最も新しい文献として客観的データも豊富で有用である (神谷俊郎 (2009) 「11 公用語政策の理想と現実 — アパルトヘイト後の南アフリカ共和国言語事情」梶茂樹・砂野幸稔『アフリカのことばと社会 — 多言語状況を生きるということ —』三元社)。またこの論考に挙げられている参考文献も大いに役に立つ。
- 9) インド人などアジア系住民は南アフリカ共和国の東海岸都市部にて商業地区を形成し、カラードと呼ばれる混血系の住民は西部地域で独自の社会文化を築いている (神谷 2009:481)。
- 10) 1994 年以降の新政府誕生により、1996 年に採択された新憲法で南アフリカのすべての言語が平等の地位を保障され、新しい言語政策と言語計画が発表され、アフリカ本来の諸言語への考え方が明らかになった (楠瀬 2002:55~56)。本稿でしばしば引用する楠瀬佳子 (2002 年、「南アフリカの言語政策 — マルチリンガリズムへの道」『京都精華大学紀要』第 23 号) には、アフリカンス語が果たす社会的役割について詳しい言及がある。

憲法の第一章 6 条項では言語に関してつぎのように規定した。

- (1) 共和国の公用語はベディ語・ソト語・ツワナ語・スワティ語・ベンダ語・ツォンガ語・アフリカンス語・英語・ンデベレ語・コーサ語・ズールー語である。
- (2) わが民族固有の言語の歴史的に弱体化された使用と地位を認識し・国家はこうした言語の地位と活用を向上するために効果的で積極的な措置をとらなければならない。
- (3) 1. 中央政府および州政府は、公用語の使用、実用、費用、地域状況、必要性のバランス、住民あるいは州状況の選択を考慮して、行政の目的にどの

公用語も使用する。中央政府も州政府も少なくとも二つの公用語を使用しなければならない。

2. 地方自治体は住民の言語使用と選択を考慮しなければならない。

(4) 中央政府および州政府は、議会や法案により、公用語の使用を規定し、監視しなければならない。条項の細則(2)から逸脱することなく、すべての公用語は同等に尊重され、平等な扱いを受けなければならない。

(5) 国会で設立されたパン・南アフリカ言語委員会はつぎの点を促進しなければならない。

1. i. 公用語、ii. コイ語・ナマ語・サン語、iii. 身ぶり言語を促進させ、それらの言語の発展と使用のために条件を整えなければならない。

2. i. 南アフリカの社会で使用されているすべての言語は、ドイツ語・ギリシャ語・グジャラティ語・ヒンディ語・ポルトガル語・タミール語・テレグ語・ウルドゥ語、

ii. 南アフリカで宗教上の目的のために使用されるアラビア語・ヘブライ語・サンスクリット語、その他の言語を促進し、尊重することを保証する。

さらに、「人権規定の言語と文化に関する項目」では、次のように宣言された：「すべての人は言語を使用し、自らの選択による文化生活に参加する権利を有する。これらの権利を行使するいかなるものも、権利宣言の規定と矛盾する態度で行使してはならない」。

11) すでに 1986 年、アフリカ統一機構 (Organization of African Unity) の第 44 回常任会議で、言語に関する行動計画が次のように発表されている：「言語はアフリカ人の文化の中心にある。アフリカの文化憲章の条項と一致して、アフリカ人の文化的進歩・経済的・社会的発展を促進するには、アフリカ諸言語の実際的な運用をなくしては不可能だろう。国民生活の他の領域と同様に、アフリカは言語の分野で自立とアイデンティティを主張する必要がある」(楠瀬 2002:53)。

12) アフリカでは未だに旧宗主国の言語を公用語にしている国が多いが、エリトリアには公用語がなく、公的機関や学校では 9 つの民族語が平等に扱われている。小学校 6 年生まで母語で教育を受け、国会では通訳を交えて各自の民族語で議論しているのである。現在、このように民族語が法律によって保証されて

- いるアフリカの国はエリトリアと南アフリカとエチオピアだけである（楠瀬 2002:52）。
- 13) アパルトヘイト体制下で教育を受ける機会に恵まれた者の立場から、経済活動と密接に結び付いた英語が高く評価され、アフリカ諸言語が蔑視される傾向にあった。また、これまでアフリカ諸言語の側に、効果的な言語教育プログラムがなかったことが原因で、新憲法に書かれた言語に関する理念を具体的に実践していく政策立案の段階で混乱が生じたことも事実である（楠瀬 2002:56）。
- 14) 総じてアフリカース語を第一言語とする人は約 600 万人、第二言語とする人は約 1,000 万人とされている。
- 15) <http://www.muturzikin.com/cartesafrique/1.htm> より。
- 16) ドイツの言語学者 Otto Behaghel 以降、1 言語の語史的研究は社会方言を無視しては成立し得なくなった。
- 17) 南アフリカ共和国は多くの言語が同時に使用されるマルチリンガルな社会であることは確かである。こうしたマルチリンガルなコミュニティでは、人びとは自らの言語と他民族語を併せて享受する機会をもち、言語には民族文化・価値観・アイデンティティーなどが分かちがたく付与されていると認識されていなければならない。真にマルチリンガリズムを実現すること、すなわち、アフリカ諸言語をいかにしてマルチリンガリズムの中に組み込んでいくかは国家をあげての課題となる。自らの民族言語に対する自信を誰もがもてる社会が必須であるが、南アフリカ共和国では（事実、教育の現場で言えば英語の優位は揺るがないものの）、英語と自らの母語を共に学習することが重要だと考える人が圧倒的に多いという統計数値がある。真のマルチリンガリズムに向かって歩み出す環境はあるのである（楠瀬 2002:61-63）。

文法

- Botha, T.J.R., et al. (1989); *Inleiding tot die Afrikaanse taalkunde*; Pretoria (South Africa) : Academica
- Conradie, C.J. (1986); *Taalgeskiedenis*; Pretoria (South Africa): Academica
- Donaldson, Bruce C.; *The influence of English on Afrikaans: a case study of linguistic change in a language contact situation*; Serva

- Kannemeyer, J.C. (1984); *Geskiedenis van die Afrikaanse literatuur*; 2 vols.; Pretoria & Cape Town (South Africa): Academia
- Lockwood, William B. (1978); *An Informal History of the German Language, with chapters on Dutch and Afrikaans, Frisian and Yiddish*; London : Blackwell
- Macnab, Roy Martin ; *The youngest literary language: the story of Afrikaans*; South African Broadcasting Corporation
- Johannes Jacobus (1952); *Theories about the Origin of Afrikaans*; Johannesburg (South Africa) : Witwatersrand University Press
- Stoops, Y.H.L. (1982); *Afrikaans-Nederlandse taalverkenning*; Port Elizabeth (South Afrika): Universiteit van Port Elizabeth
- Villiers, M. de (1983); *Nederlands en Afrikaans*; Cape Town (South Africa): Nasou

読本

- Bauling, F.E. (1926); *Afrikaans for English Schools: an introductory Afrikaans reader, writer and grammar*; Pretoria (South Africa): J.L. Van Schaik
- Botha, M.C., and J.F. Burger (1940); *Maskew Miller' s Grammar of Afrikaans*; Cape Town (South Africa): M. Miller
- Breyne, Marcel Romeo (1954); *Lehrbuch des Afrikaans für den Schul- und Selbstunterricht*; München: Pohl
- Burgers, Marius Philip Olivier (1971); *Teach yourself Afrikaans*; New York: David McKay Co.
- Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints Missionary Training Center (1981); de Villiers, M. (1983); *Nederlands en Afrikaans*; Cape Town (South Africa): Nasou
- Donaldson, B.C. (1993); *A Grammar of Afrikaans*; Berlin & New York: Mouton de Gruyter
- Du Plessis, Willem Johannes Carel (1951); *Afrikaans Simplified for English-Speaking Students*; Cape Town (South Africa): Juta
- Groenewald, P.W.J. (1954); *Learn to Speak Afrikaans: a new method based on one thousand words*; Pietermaritzburg (South Africa): Shuter
- Hoogenhout, Nicolaas Marais (1904); *Praktisches Lehrbuch der Kapholländischen*

- Sprache (Burensprache): Sprachlehre, Gespräche, Lesestücke und Wörterbuch; Wien: Hartleben
- Lint, J.W. van (1946); Juta's Practical Afrikaans Grammar for Teaching and Self-study; Cape Town (South Africa): Juta
- Loubser, J.E., and S.J. Du Toit (1876, 1980); Eerste beginsels van die Afrikaanse taal; facsimile edition; Cape Town (South Africa): Tafelberg
- Mans, I.J.V. (1973); Afrikaans - eerste taal: praktiese kursus; Johannesburg (South Africa): Perskor
- Piek, John C. (1940, 1949); Afrikaans made easy; Cape Town (South Africa): M. Miller
- Potgieter, Dirk Jacobus (1967); Afrikaans for English-Speaking Students; Cape Town (South Africa): Juta
- Stokvis, Jozef Emanuel (1927); Afrikaans in 30 lessons; London: The Linguaphone Institute
- Tromp, Jan Nieuwoudt (1952); Afrikaans for all; London: Dent
- Truter, Cornel (1982); Begin Afrikaans; Cape Town (South Africa): Maskew Miller
- Wiid, Jacobus C. de Beer (1949); The Essentials of Afrikaans; Cape Town (South Africa): Juta

辞書

- Bosman, D.B. (1945, 1962); Tweektalige skoolwoordeboek: Afrikaans-Engels, Engels-Afrikaans; Cape Town (South Africa): Nasionale Boekhandel
- Brand, D. (1936); Drietalige idioomboek in Afrikaans, Engels, Duits; Cape Town (South Africa): Juta
- Coetzee, Abel (1966); African-English, English-African dictionary / Afrikaans-Engels Engels-Afrikaans Woordeboek; Brooklyn: P. Shalom
- Dekker, L. (1990); Nederlands-Afrikaanse woordeboek; Pretoria (South Africa): J.L. van Schaik
- Grobbeelaar, Peter (1988); Juta se Afrikaans/Engelse woordeboek: beginners; Cape Town (South Africa): Juta

- Grobbelaar, Peter, and D.B. Bosman (1987); Afrikaans-Engelse woordeboek: English-Afrikaans Dictionary; Cape Town (South Africa): Reader's Digest Association South Africa
- Joubert, P.A. (1992); Bilingual Phrase Dictionary / Tweetalige frasewoordeboek; Cape Town (South Africa): Tafelberg
- Kritzinger, Matthys Stefanus Benjamin (1952); Woordeboek Afrikaans-Engels, Engels-Afrikaans: en die spelreëls van die Akademie; Pretoria (South Africa) : Van Schaik
- Kritzinger, Matthys Stefanus Benjamin (1968); Klein woordeboek: Afrikaans-Engels, Engels-Afrikaans; Pretoria (South Africa): Van Schaik
- Kritzinger, Matthys Stefanus Benjamin (1969); Groot woordeboek: Afrikaans-Engels/English-Afrikaans; Pretoria (South Africa): J.L. Van Schaik.
- Kritzinger, Matthys Stefanus Benjamin (1972); Skoolwoordeboek: Afrikaans-Engels, English-Afrikaans; Pretoria (South Africa): Van Schaik
- Kritzinger, Matthys Stefanus Benjamin, and Jan Kromhout (1988); Afrikaans/Engels English/Afrikaans Dictionary; Pretoria (South Africa): Van Schaik
- Kromhout, Jan, and M.S.B. Kritzinger (1993); Afrikaans-Engels Mini-Woordeboek / English-Afrikaans Mini-Dictionary; 5th revised edition; Pretoria (South Africa): J.L. van Schaik
- Schulze, H.G. & Trümpelmann, G.P.J. (1957); Handwörterbuch Deutsch-Afrikaans, Afrikaans-Deutsch; Berlin : Beperk, Pret
- Steyn, H.A. (1964); Wörterbuch Deutsch-Afrikaans, Afrikaans-Deutsch; Pretoria (South Africa): J.L. van Schaik
- Strelen, B. (1950); Woordeboek Afrikaans-Frans, Frans-Afrikaans; Pretoria (South Africa): J.L. Van Schaik
- Terblanche, H.J. (1956); Nuwe praktiese woordeboek: Engels-Afrikaans, Afrikaans-Engels / New Practical Dictionary: English-Afrikaans, Afrikaans-English; Afrikaanse Pers-Boekhandel.

